

チェルヌイフ П. Я.

18-19世紀ロシア文章語における
ТЫ に代わる ВЫ の敬語体としての用法について (訳注1)

福安佳子 訳

I

言語を手段とする丁寧表現のかたちを研究すると、言語が社会と、また言語の発達がその言語が属する民族の歴史と分かちがたく結び付いていることが一目瞭然に確かめられる。

本論はこれらの現象のうちの一つである、一人の人に対しての呼びかけにおける ВЫ の用法について論じるものであり、本論の課題はこの言語習慣がどのように発生し、ロシアの土壌においてどのように普及したかその過程を明らかにすることである。

しかしながら確かにすべての丁寧表現のかたち、言葉の丁寧さは、その発達の何らかの段階において丁寧な呼びかけの手段の《システム》のようなものとある内的な関連をもっていた；例えば、18世紀の終わりから19世紀にかけて古いロシアの有名な社会サークルにおいて《выкающая манера выで呼びかける習慣》が確立されたことが、古くは助詞の с と呼ばれていたところの《слово- ера (да- с, нет- с などのような)》の出現と明らかに一致することも偶然のことではない。この用法は概して выでの呼びかけと関係を持っていた (訳注2)。

《выで呼びかける》習慣の歴史は、一般的にいつて多くの分野において興味をひいている。この問題が一度ならず言語学者、歴史学者の注意をひいたのも驚くべきことではない^{註1}。特にロシアではクリミア戦争の後の社会的気運の高まりの中で、言葉の丁寧表現の問題の意義が1858年だけでも二度にわたって強調された。それは一つには、ブスラーエフ (Ф. И. Буслаев) の《Опыт исторической грамматики

^{註1} ところで次の文献を参照：Dauzat A. "La defense de la langue francaise フランス語の擁護" (P. 1912 II, 2) 並びに同著者の"La vie du language言語活動の生" (P. 1924, IV)。

русского языка ロシア語の歴史文法》（二部、二章において）によって、また一つには哲学的見地からチェルヌィシェフスキー（Н. Г. Чернышевский）の論文《Критика философских предубеждений против общинного владения 共同体的所有に対する哲学的偏見の批判》（雑誌《современник 同時代人》）がある。ここではヨーロッパの諸言語の《выでの呼びかけ》の歴史についての資料が状況の一つの証拠（おそらく疑いない）として考察されている。つまり多くの現象の発達において、すなわち文化、文明の歴史において、進化、発展の終わりには別のかたちではあるが通常そのはじめを繰り返す：最初は皆互いに ты で話していた。それから《выкать》しはじめ、そして丁寧な代名詞の分化が始まった；最終的にいくつかの言語で、例えば英語で皆が互いに ты で話した、など、進化の始まりの時のように、皆にとって前とは別のかたちではあるが一つの丁寧な呼びかけのかたちが確立された（том IV, с. 314-315）。

ところでその後この問題の研究は、ポテブニャ（А. А. Потебня）の著名な論文，《Значение множественного числа в русском языке ロシア語における複数形の意味》（в Филологических записках 1887, в. 2）以外に際立ったものがなかったことを述べなければならない。ポテブニャのこの論文は大部分がロシア語よりもウクライナ語、ポーランド語の敬語形の歴史に関して述べられており、この分野に関しての他のいかなる研究をも引きあいに出すことはできない。

《выканье 一人の相手に対する выでの呼びかけ》の歴史に関する本論に入る前に今一度（ブスラーエフ、他にひきつづいて）次のことに言及する必要があると考える。すなわち《丁寧な代名詞》（*pronomia reverentiae*）は、一般的に言って丁寧な呼びかけの唯一のかたちではなく、《выканье》の欠如は《無作法》、言葉の《欠陥》などのいかなる証拠にもなり得ないことである。

それぞれの民族において、その民族が特異であればあるほど、伝統のある不変の《国際的な》（《выканье》のような）かたちでの丁寧表現とならんで、太古の昔から用いられてきた固有の丁寧な呼びかけのかたちをもっている。ブスラーエフは、論文《Опыт》の中で、《わが民族の言語は丁寧さを表わす二人称複数形の代名詞を知らずに、話者の間の関係におけるさまざまなニュアンスをあるいは愛称形の語尾の助けを借りて、またあるいは親族をあらわす名詞の助けを借りて表現している。

例えば, [ты] дедушка (おじいちゃん), отец мой (父さん), мать моя (母さん), батюшка (お父さま), матушка (お母さま), брат (兄弟), братец (兄ちゃん, 弟), дядя (おじさん), дядушка (おじちゃん), тетка (おばさん), кум (〈知り合いの〉おじさん), кума (〈知り合いの〉おばさん) のようにである 》と述べている。このような相手に対する心からの呼びかけは現在に至るまで圧倒的に使われ続けている (§ 203, прим.5)。

ただ残念なことには我が国の言語学においてこれまで, ロシア民族言語のこのすばらしい特徴 ---- 基本的教養に属する語彙的手段, 特に丁寧に呼びかけたり, 親愛の情をあらわす語彙的手段が豊富なこと——についてほとんど研究されていない。

また著名なシベリアの民族学者で民俗学者でもあるヴィノグラードフ (Г.С. Виноградов) のこの分野における考察^{註2} 以外におそらくいかなる他の資料も挙げることはできないであろうことも残念なことである。

II

ロシアの土壌において《 выで呼びかける 》習慣がいつごろ発生したか, その時期についての完全に明確な資料は存在しない。18世紀の後半の人々にとっては《выканье》は比較的新しい現象に感じられた。ついこの間まで, 18世紀のはじめまではこの習慣は存在せず, もともと西側から, フランス語から入ってきた習慣のように感じられた。例えば, 周知のとおり, フォンヴィージンの喜劇《親がかり》の中の言葉, 第3幕のはじめのスタロドゥームのせりふの中の一つに次のような言回しがある。《僕の親父は僕をその当世風に教育したんだ... 親父はピョートル大帝に仕えてた。当時は一人の人には выでなく тыで呼びかけられていた。あの頃はまだ, 皆が自分を大勢の人間だと見なすほど人をイカレさせるすべも知らなかったから。そのかわり今は大勢の人間でも一人の人間の価値もない》。

このように18世紀後半の批判的傾向を持った作家たちは(喜劇《親がかり》は1782年に上演された) この《выканье》の現象をいわゆる《上流社会》の生活の否定的な現象としてとらえる傾向にあった。《上流社会》に対して彼らは敵対していた。

ちょうど同じ時期にスマローコフは彼の皮肉をこめた小論《Истолкование личных

^{註2} "Русские говоры центральной части Тулунского уезда Иркутской губ. Илкуртук県, トゥルン郡中心部におけるロシア語方言" (筆者との共著) Иркутск, 1924, с.17-18.

местоимений я, ты, он, мы, вы, они 人称代名詞 я, ты, он, вы, они の解釈》を再版した（Полное собрание всех сочинений, 1-е изд. 1781, 2-е изд. 1787, том VI). そのかなりの部分が我々の関心事である現象についてさかれている：《тыは二人称単数形であり，ロシア語においては本来的にそのように用いられていた．ところが現在では，подлый^{註3}な代名詞にされてしまった》．以降はほとんどがこの《подлый》な人称代名詞の用法について述べられている．《規則では，これは理想的な判断に反するものであるが，выと言わなければならない．一方 тыは賤民のためだけの表現にされてしまった．例えば，召使，百姓，御者，煙突掃除人，友人（！）などのための》．この新しい流行の発生に関する問題については，スマローコフの考えでは《代名詞の ты から вы へのごとき変化は高僧の錫杖（長い杖）が考え出されたところでおこなわれた．そのために，この称賛に価する丁重な表現は全く巧みに考案され，他の諸言語にも受け入れられた》．次にスマローコフは皮肉りながら，《ドイツ語のように》 ты が они に替えられていたらもっとよかったのだが，と述べている．それはこの они という人称代名詞を《ドイツ人はフランス語の вы やロシア語の古めかしく不格好な ты のかわりに用いているからである：なんとすれば ты の代わりの они はわがロシア語をより美しくしたのであろうから（第2版による с. 294-295）》と見なしていたからである．

スマローコフの論文は最初は1769年に出版された．この論文について，クルガーノフ（Курганов）の《Российская универсальная грамматика или всеобщая письмословие ロシア語普遍文法または万人の文章語》（СПБ，1769）の中に言及されている：《ではいったい何故我々は理性的判断に反して，ただ外国人を真似ながら古い ты の代わりに вы と，твое の代わりに ваше, ваши, ваша などと言ったり書いたりするのであろうか．このことに関しての面白い解説を，Пчела の4月号に参照されたし》[100]．

このようにスマローコフの説においても，《выканье》の現象はロシアにおけるフランスの影響の始まりと直接的に関係していることから，この現象は比較的新しく

^{註3} 《подлый》やその派生語《подлость》，《подлец》は18世紀の半ばにおいてはまだなんの否定的，感情的負荷もなく《простой》という意味で用いられていた．Болотов の回想記の中の《Жизнь и приключения (и пр.) 人生と冒険（他）》（Academia, 1931, том II, с. 373）における彼の良き知人についての記述参照：《彼は，なんの気がねもしらないとても単純で（прост）本当に素朴（подлый）な男である》．

当世紀の初めにはまだ存在しなかった、とされているようである。

この見解は現実とどれだけの一致をみるであろうか。周知のとおり18世紀初頭に出版された良きマナーに関する教科書においては総じて вы で呼びかけるように勧められている。その中でまず第一に挙げられるのがドイツ語から翻訳され1708年にモスクワで出版された手紙の用例集である《Приклады, како пишутся комплименты разные さまざまな社交辞令をいかに書くかの例》である。ここでは、вы での呼びかけのかたちが支配的である：《Мой господине, еликое желание, еже я от вас радостное уведомление вашего счастливого состояния получить имею. あなたさまから、つつがなきご様子のお知らせをいただけますよう切に願います》... しかしながら常に一貫しているとは限らない。上に挙げた例に引き続いて次のような例がある：《Мой господине, изволь свою высокую склонность мне показати (и пр.) あなたさまに、わたしのあなたさまへの厚き好意を示させて下さい》など。ペカルスキー（Пекарский）の《Наука и литература при Петре Великом. ピョートル大帝時代の学問と科学》（т. 2, 1862）を参照されたし。ここには比較のために17世紀の ты のみで呼びかけられている書簡の例が載せられている。

《手紙の書き方例》の後すぐに、1717年《Юности честное зерцало, или показание к житейскому обхождению 青年時代の正しい鏡または日常交際の指針》が出版された。これもまた、おそらくドイツ語からの翻訳である。この本において両親への вы での呼びかけが丁寧なかたちとして勧められている：《そして次のように言う：что извольте, государь батюшка или государыня матушка, или: что мне прикажете, государь, а не так, что: 〈чего, што, как ты говоришь, чего хочешь(и пр.)〉 お父様、またはお母さま、どうかお願いします。または、私にお命じ下さい。そして〈なんて言った、何がして欲しいって、〉などとは言わない》。

おそらくこれらの教科書は вы での呼びかけを宣言しながら、何かに基礎を置き、何か日常的な基盤に既に支えられていたにちがいない。

вы での呼びかけのかたちは外国の模倣の模範となりたかった人々のグループの中で既にある程度の普及をみていた。

ピョートル自身、自らの手紙の中で人称代名詞 вы を90年代のはじめから丁寧な呼びかけのかたちとして用いている。例えば、1694年の秋に出したアルハンゲリスク

知事のアプラクシン (Ф. М. Апраксин) への手紙に ты のかわりに вы が, また述語の単数形にかわる複数形が見受けられる。この時期まではピョートルは彼に対して ты のみで呼びかけていた: 《Понеже... письмом... нас уведомить изволил, в котором о бещинстве галанских капитанов объявляется... なんとなれば, オランダの船員たちの無礼な振舞いについて手紙によって我々に知らせられ, そのことについて決断を求められておられるが》(その後も ты になっている) (Письма и бумаги П. В., том I, №33)。また次に: 《Письмо ваше выразумев, соответствую... Дивлюся, что затем отповеди другой требуете あなたの手紙を理解いたしたので返事をしよう。あの後また返答を要求されているのには驚いた》, しかしながらその後は: 《С тем и отпускаяй それは放っておけ》 №34など。また №36, 315, 326, 377, 379, 395 参照。しかしながら, 他の彼への手紙は ты となっている。ロモダノフスキー (Ф. Ю. Ромодановский) 公爵への手紙 №37も1695年からはじまって大部分が вы で書かれている: 《Письмо вашего просветлейшества... мне... отдано... За вашей многие... молитвы... Холопи ваши... Отдаюсь в покров щедрот ваших あなた様からのお手紙を受け取りました... あなたのために多くのお祈りを... あなたの忠実な僕... あなたの御加護の中に身をまかせます》また, №56, 90, 93, 210 などにも同様の例がある。たまに例外的に次のように始まるものもある: 《Письмо твое... мне отдано... За которую вашу государскую милость... за сим желаем вам そなたの手紙を受け取りました... それに対してあなた様に... これに対してあなたに願いつつ》など, №58 また124他も同様である。しかしながら ты での手紙もみとめられる: №41, 213 などである。вы での呼びかけは, (常に一貫してではないが) ゴロヴィン (Ф. Головин) (№297, 327, 328), レプニン (А. Репнин) 公爵 (№339, 382) ストレシネフ (Т. Стрешнев) (№75, 334), シエレメチエフ (Б. Шереметев) (№357) への手紙にみられる。しかし, 彼らへの手紙にも ты もみられる。

また外国人に対しても: ヴィニウス (Виниус) へは №52, 73, 369, 370, 374で вы が, №59, 65, 70で ты が, ゴードン (Гордон) に対しては №43で вы が, クレヴェット (Кревет) へは №42, 269で вы が, №59, 65, 70で ты が用いられている。

ピョートルへの手紙に関していえばこれらの中におもしろい現象が観察できる。ピョートルの特使である外国人たちは通常大帝に対して вы で呼びかけている。例えば, ヴィニウスは (いつもというわけではないが) №27, 40, 70, 95, 122などにおいて, ゴードンは №114, 276において, ヴェイデ (А. Вейде) は №270, 276におい

て、クレヴェットは №144, 295において、フォン・ローゼンブッシュ (Фон Розенбуш) は №42, 73, 82, 99, 123で、ステイリス (Стейльс) は №276でその例が見うけられる。外国人からの ты で書かれた手紙はほとんど観察できない。この理由として考えられるのは、これらは自筆のものではないことである。もっともアンナ・モンス (Анна Монс) の手紙 (№276) は、おそらく彼女自身の筆で書かれたものであるが。

それに反して、ロシア人の特使たちは大部分 ты での呼びかけを用いている。例えばナルィシキン (Л. Нарышкин) の手紙がそうである (№39, 73, 99, 276 など)。またアプラクシン (Апраксин) (№33, 315), ブトゥールリン (Бутурлин) (№328), ゴリツィン (Б. Голицын), ゴロヴィン (А. Головин) (№146, 305), ゴロヴィン (Ф. Головин) (№300, 330), ロモダノフスキー (Ромодановский) (№74, 93, 96, 165, 331など), ストレーシネフ (Стрешнев) (№331) などと同様である。

ピョートルに вы で手紙を書いているのは駐ポーランド大使のドルゴルーコフ (Г. Ф. Долгоруков) である (№341, 387)。またプレシプルグ 並びに全コクエーの大主教であるゾートフ (Н. М. Зотов) の手紙でもわざと公文書のスタイルを真似たものの中に вы がみられる (№300)。プレオブラジェンスキー連隊の司令官であるゴロヴィン (А. М. Головин) 将軍も時々大帝に対して вы で呼びかけている (№146)。

ты と вы のかたちが混じりあった手紙もみられる。例えばプレシェーエフ (Прещеев) のものがそうである (№396)。

一連の場合においてピョートルはあれこれの宛名人に対して、彼らがピョートルに対して ты でよびかけているにもかかわらず вы で呼びかけている。例えば、アプラクシンに対して (№315で参照)、またロモダノフスキーに対しても (№93, 96, 165, 331で比較参照)、ストレーシネフ に対しても (№334) そうである。

エカテリーナ二世の治世の末期の伯爵夫人ゴロヴィーナの回想録を参照してみよう。チェルトコフに関して、彼とエカテリーナ女帝との会話が記述されている：
Екатерина:----Как в а м не стыдно думать, что я буду сердиться на в а с. Чертков:—
Ох, матушка моя, как мне говорить с т о б о й, как отвечать на т в о ю доброту. (エカテリーナ:— あなたのことを私が怒るだなんてよく恥ずかしげも無く思えますねえ。チェルトコフ:— ああ、あなた様、どうお話したらよいのでしょうか。どのようにあなたの善意にお答えすればよいのでしょうか。) ゴロヴィーナによれば、《この ты での呼びかけはロシア語にお

いてとても表現豊かなもので会話の中の慇懃さを全く弱めるものではない》
(Записки гр. Г- ой. Истор. Вестник, 1899, февраль, с. 408, 409).

総じて西ヨーロッパ的な意味において《文化的》な人間であればあるほど、この時期 вы での呼びかけにより固執していたと言える。ピョートルの時代の初期において既にこのような状況であった。時代が下れば下るほどこの新しい呼びかけの形は大きな普及をみた。1697年と1717年のピョートルの外国行きもこの状況をほとんど変えはしなかったようである。もっとも若い皇帝がゴードンやレフォルト、ドイツ村に住んでいた他の外国人たちと接近した初期の時代に、おそらく自国民の間で芽生え始めていた вы での呼びかけの流行を彼の洋行が助長させる要因となったのは言うまでもないことであろう^{註4}。

しかしながら17世紀の90年代においてはこの現象はまだ広く普及をしてはいなかった。ロシア人の間では ты での呼びかけが日常的であり、普通のことであったと言ってよい。1696年に出版された豊富な《ロシア語会話》の用例を供給してくれるルドルフの《Русская Грамматика ロシア語文法》においても、一度たりとも вы のかたちは用いられていない。その10年後に出版されたコピエーヴィッチ (И. Копиевич) の《Руководенье в грамматику 文法への手引き》においても同様である。(《Русская грамматика Лудольфа》Лгр. 1937 参照)。

ピョートルの治世の後半における状況に関して、詳しくみる必要はないであろう。

とは言え、イヴァン・アレクセーヴィッチの未亡人プラスコーヴィヤ・フョードロヴナ皇太后とピョートル1世の妻エカテリーナ・アレクセーエヴナ皇后との書簡のやりとりは興味深い。プラスコーヴィヤ・フョードロヴナの手紙は、ты, вы 両方の呼びかけを混用していることで特徴的である：《Здравствуй, свет мой, на

^{註4} 具体的にどのような外国の影響のもとにピョートルの陣営にこの《выканье》の流行が入り込んだかを申し述べるのは困難である。ゴードンはイギリス人でレフォルトはジュネーブから来たフランス人である。よって、二人ともほとんど ты のない言葉で話していた。ドイツ村に住んでいた居住者の中にオランダ人もいた(ピニウス)。周知のとおり、オランダ語では代名詞 ты は全く存在しない。これは代名詞 вы にその場所を奪われたからである：gij (複数主格) または u (複数与格, 対格) である (D. Haek の Die Kunst die hollandische Sprache durch Selbstunterricht sich anzueigen, p.40 他を参照した)。特にピョートルはオランダ語が気に入ったようである。《min her》(オランダ語では mijn heer) という呼びかけ, 《Piter》(オランダ語では Pieter) という署名が、彼の1694年以降の書簡において常に用いられるようになっている。したがってこの現象は彼の最初の外国旅行以前のことである。

множество лет. Доношу твоей милости.. ごきげんよろしゅう、わたしの光さん。幾年も幾年も光かがやきますように。あなたの善意に対してお知らせします》。しかしその次に《 Прикажи нас уведомить писанием о вашем здравии... Прошу вашей милости.あなたの健康について手紙で知らせることを私たちにお命じください。どうか宜しく願います)》など(№1, 1716年)。また、《Пожалуй, государыня, не оставь нас писанием...Доношу вам, государыне... Прошу у Вас, государыня, милосми: побей челом царскому величеству, (и пр.) どうか皇后様、書簡のやり取りを続けましょうね。皇后様に申し上げます。あなた様をお願いしたいのです。大帝の前に額づいてください。など》、そして《 И остаюсь невестка ваша Прасковьяあなたのプラスコーヴィヤ》(№1, 1721年)。その他の手紙もこのようである。反対に外国人であるエカテリーナ・アレクセーエヴナの手紙の呼びかけは、原則的に вы になっている。唯一の例外ではあるがしばしば用いられるのはこの手紙の最初にみられる挨拶の文言である：《Государыня моя невестушка, царица Парасковия Федоровна — здравствуй на множество лет... Доношу вам, моей государыне... Прошу вас... При сем объявляю вам(и т. д.) 私の君主様、パラスコーヴィヤ・フョードロヴナ皇太后様、幾年々までもご機嫌麗しきことを。私の君主様、あなた様をお願い申し上げます...このことについてお知らせいたします。など》(№9, 19, 20, 33参照)。

プラスコーヴィヤ・フョードロヴナの他の人々への手紙もだいたい上で述べた状況と同じである。メンシコフ (А. Д. Меншиков) に宛てた手紙もそうである。

《 Батюшка мой, светлейший князь Александр Данилович. Здравие вашева желаю... Пожалуй, свет мой, прикажи...(и пр.) あなた様、光り輝くアレクサンドル・ダニーロヴィッチ公爵様、あなた様のご健康をお祈り申し上げます。どうか、あなた様、お命じになってください。など》(№10. 1716年)。また、パラヴィンキン (М. А. Половинкин) に対しても《Господин Половинкин, благодарствуем за радение ваше, которое имеете(и пр.). Послужи нам и исправь, что подлежит, по рассмотрению своему и для расхода на вышеписанное денег извольте взять у служителя нашего Багреева...パラヴィンキン様、...してくださるあなた様のご配慮に感謝をいたします。我々を助けて、ご自分の判断により必要なことを修正してください。上記のことに必要な費用は召使のバグレーエフに貰ってください。》(№34, 1722 年., также:№39, 36). 《Письма русск. государей, вып. 2. М., 1861ロシア君主の手紙第二版 モスクワ 1861年》を参照。

一方、メクレンブルグスカヤの公妃であるエカテリーナ・イヴァーノヴナの手紙

もエカテリーナ・アレクセーエヴナの手紙と通じるところがある。なぜなら、挨拶言葉の例外を除いて вы で呼びかけられているからである（Письма русск. государей, вып. 2. М., 1861., №43）。上記の書簡集の3版（М., 1861）に納められているクルランドの公妃（1716-1729）、アンナ・イヴァーノヴナの手紙も、вы か（メンシコフへ№3, 11, 14, 95, 他, エカテリーナ・アレクセーエヴナへ№65, 122他）、または、しばしば ты, вы 混合のかたちで書かれている。

このように、17世紀の終わりと18世紀のはじめの вы での呼びかけは、特にロシア化した外国人、または長きにわたり外国人とのつきあいでその呼びかけ言葉に慣れているロシア人に特有のものであった。《выканье》の歴史においてこのことが重要な役割をはらんでいたと考えられる。百年後でさえ、ты の代わりに вы の使用はときにある種の外国的な印象を想起させた。例えば、ブラーゴヴォ（Благово）は自らの回想録である《Рассказы бабушки おばあちゃんのお噺》(1885)の中で公爵夫人ヴァーゼムスカヤについて述べている。《彼女はすべての人に対して慇懃に振る舞った：自分の、またよその下男、小間使いにも、いつも вы で呼びかけた。このことは、おかしくもあり、奇異でもあった。自領の村にいてさえ村長に：--- Послушайте, бурмистр, я хотела вас попросить... 村長さん、あなたにお願いしたいのですが... と言っていた。これはもう、あまりにも外国的過ぎた。》(№451, 19世紀の30年代の話である)。

18世紀のはじめのいわゆる《上流社会》の枠内での вы で呼びかけるかたちの普及について、ピョートルの時代の中編小説が（かなりの条件付きではあるが）理解を与えてくれる。例えば、《Гистория о российском матросе Василии Кариотском ロシアの水兵ヴァシーリー・カリオツキーの話》の中では、вы で話しているのは、皇帝や廷臣（ローマ皇帝、イラクリア王女、提督）だけでなくロシアの水兵ヴァシーリー・カリオツキー自身がそうである。しかも幾人かの人たちの会話の中でかなり首尾一貫している：ヴァシーリーが提督に言うには：《Извольте вы ехать возвратно во Флоренское государство... И прошу вас все подробно представить... И с вами ее(королевну) не отпущу, дондеже сам ваш король, а ее родитель будет в Цесарию. さあどうぞフローレンス国へお戻りください。そしてすべてを詳細にお知らせくださいますようお願いいたします... あなたとともに王女は行かせません。あなたの王、彼女の父親が皇帝になるまでは》。実際ヴァシーリーもある場合には話し相手に対して ты で呼びかけている。し

かしながらこれは原則からはずれているものではない。彼の父親に対しての呼びかけも古いロシアのスタイルではじまっている：《Государь мой батюшко, прошу у тебе родительского благословения, изволь мене отпустить(и пр.) お父様、どうか父としての祝福をお与えくださり、わたしを行かせて下さい。など》。しかしながら最後の方で彼は вы に代えている：《будет даваться жалованья, от которого и вам буду присылать. 俸給が支払われます。その中から貴方にもお送りします》。また、王女イラクリアとの会話の中で《Ежели меня бог вынесет от них, то и тебе не оставлю, токмо прошу не промолвитца им, что я у вас был. もしも神がわたしを彼らのところから連れ出したとしても、あなたを一人にはしておきません。ただどうか彼らに、わたしがあなたのところにいたことは言わないで下さい》。また、《アリア》においても：

Ах, дражайшая, всего света милейшая, как ты
 пребываеш(и пр.)
 ... Иже сию арию вам объявлю (и т. д.)

あなたのよう愛おしく世にも可愛らしきかたが
おいでになる
... このアリアをあなたさまに捧げましょう

（Б. Дунаев 《Библиотека старорусских повестей》, Гистория:, М., 1913, с. 26, 1, 15, 4)^{註5}

従って、ピョートルの時代には、フォンヴィージンのスタロドゥームのことばに反して一人の人間はすでに **вы** と呼ばれ、外国人の習慣から取り入れられた呼びかけの手法はすでに広い普及をみていた。

III

⁸⁵ ピョートルの時代におけるтыに代わるвыの用法の問題について詳しくは触れないが、興味深いのは例えば主語と丁寧な代名詞を受ける述語の一致に関する特徴である。述語はしばしばこの場合単数形で用いられている：Изволить ваша милость о адмираль...писатьあなたが総督に書かれた(№75, 1696г.); а о Здешнемъ известенъ ваша милость будьこのことについてあなた様にお知らせします(№101, 1696г.); пишешь ваша милость о наймеあなたが雇用のことについて書いている(№232, 1698г.); тутъ же писалъ ваша милостьそこにあなたが書いた(№232, 1698г.); тутъ же писалъ ваша милостьそこにあなたが書いた(№251, 1698г.); самъ ваша милость сведомъ, каково туркомъトルコ人にとってどうかあなた様ご自身がご存知である(№377, 1701г.); а самъ ваша милость изволь статьあなた様ご自身が望まれた(№385, 1701г.); ваша милость делалあなたがなした(к №396, 1701г.). プーシキンの《大尉の娘》の平民の会話：《Думал ли ты, ваше благородие, что..あなたさま, あなたは...のように思っただろうか。》など参照。

しかしこのことはまさにピョートルの時代から我が国で *выканье* の歴史が始まったことを意味しているのであろうか。おそらくそうではないであろう。*вы* での呼びかけはそれ以前から知られていたが、しかし *ты* に代わって *вы* が用いられていた領域はただある交際の範囲で、また書き言葉のジャンルでのみという非常に制約的なものであった。

外交的な文書において、また外交文書の遣り取りの中で、外国の政府の代表や外国の君主などに対して、ロシアの地ですくなくとも15世紀の終わりから *вы* による呼びかけの用例をみとめることができる。もちろん、当時はこの用法はほんのわずかししか使われておらず、ただ《*ваша высокоость 陛下*》などの称号のみにみられるだけのようである：《*к высокоости вашей и к иным князем 陛下と他の公へ*》、《*тые листы к высокоости вашей послали есмь* この文書を陛下にお送りしました》など。《*что высокоость твоя учинишь 陛下が為されること*》（マクシミリアンI世からイヴァンIII世への1492年の手紙²⁶）；《*мы его к вашей светлости отпустили* 我々は彼を陛下のもとに釈放しました》、《*бог всеильный да умножит здравия... величеству твоему 全能の神があなた様に健康を増進して下さいますように*》（1493年のイヴァンIII世の返書の中に）。

当時のふつうの標準的な呼びかけ言葉はやはり *твой* との語結合である *твоя высокоость*, *твое величество* または *твое величие* などである（Памятники дипл. сн. с С. Рим. Имп., ч.I, с. 109-110）。

従って、《称号の》*вы*, *ваше* はこの時代、翻訳の文書や外国の僧侶からロシア人に宛てた手紙の中だけでなく、皇帝イヴァンIII世の書簡の中にもみうけられる。彼の治世の終わり頃には、この現象はより顕著になってくる：《*к наияснейшему господству вашему... донести* 神々しきあなた様に報告する》《*из тех стран ваших* あなたのそちらの国々から》（すなわち称号との語結合の用法のみでなく）、《*к вашей милости ехать* あなたさまのところへ行く》（マクシミリアンの手紙と1504年の彼の使者のことばの中で）；また《*вашия светлости грамоту* あなた様の書状を》、

²⁶ もちろんこれはラテン語から翻訳されたものである。参照：《18世紀まで外交官の共通語または *lingua franca* はラテン語であった。外交官たちはラテン語で文書を交換しただけでなく、ラテン語で話もしていた。1648年のウエストファリア条約も1670年のイギリス - デンマーク条約も1674年のイギリス - オランダ条約もすべて、条文、署名ともラテン語が用いられた。これが一般的な習慣だったのである》（Г. Никольслн, Дипломатия. Рус. пер. 1941. с.131）。*вы*での呼びかけはラテン語には中世の初期にはすでに入り込んでいた。しかしこの時代にもその後においても特に徹底して用いられることはなかった。

《благорарим вашу свитлость あなた様に感謝いたします》, 《посланника вашего речи выслушали あなたの使者の言葉を聞いた》(上記の1493年のイヴァンIII世の返書の中で)などである。しかしながらこの習慣はまだ徹底して導入されたものではなかったようである(П. Д. С. (訳注3) и пр., ч. I, с.117 и сл.).

このような状況がそれ以降も続くことを予測することができる。しかしながらこれ以降の資料はその期待に答えるようなものではなく、あるいはあったとしてもほんの一部である。16世紀の終わりまでの文書の中には称号に用いられる *выканье* はただロシア語訳において外国の支配的な人物の文書や書簡の中にみられるだけであり、ロシアの皇帝からの外国への文書や書簡の中には見受けられない：*наиясности вашей... говорити* 神々しきあなた様に申し上げる(Максимилиан, 1517 г. Памятники, ч. I, с. 310), *наиясности вашии послы* 神々しきあなた様の使者(*ib.* (同書), 341), *наиясности ваша изволит* 神々しきあなた様がお望みになる(*ib.*, 363: еще 390 и др.); *вашей пресветлости известили* あなた様にご報告申し上げた(Максимилиан, 1576 г., Памятники, ч. I, 518, 521 и др.) *вашему пресветлейшеству сказали* あなた様に申し上げた(*ib.*, 520), *вашии милости кривду* あなた様の善事が不正を(*ib.*, 520), *до вашей вельможности отпустити* вашего величества желание исполнити あなたの貴人の中に加え、あなた様の望みをかなえること(*ib.*, 521), *посланника вашего Никона к вашему величеству отпустил* あなた様のもとへあなた様の使者ニコンを帰した(*ib.*, 521), *то ваше писанье* あのあなたの手紙(*ib.*, 521 и пр.); *и учиним вашей любви и вам... ведомо* あなたの愛とあなたにお知らせします(Рудольф II, 1580 г. Памятники, ч. I, 822); *и мы с вашей любви с посланником с Офонасьем с Резановым* 私とあなたの使者アフナーシー・レザーノフ(Рудольф II, 1581 г. Памятники, ч. I, 836)など。

ところでロシアの皇帝の書簡には外国の僧侶の称号にもまたこれに関連したものにも *выканье* は用いられていない。例えば、イヴァンIV世はルドルフに宛てた返書の中で彼に称号のない *ты* で呼びかけている：*и мы с отцом твоим, блаженные памяти с Максимилианом Цесарем... и ты, брат наш, к нам...писал... и послы твои, брата нашего дражайшего... с тобою с братом нашим с Рудольфом Цесарем и т. д.* あなたの父上と私は今は亡きマクシミリアン皇帝... そして我々の兄弟であるあなたは我々に書いた...

そして我々の親愛なる兄弟であるあなたの使者たちは... 我々の兄弟ルドルフ皇帝、あなたとともに...など грамота 1580 г. Памятники, с. 767-769).

そして16世紀の終わりになってはじめてフョードル・イヴァーノヴィッチ (訳注4)

の書簡の中に *выканье* の復興の試みが窺える：от вас , брата нашего дражайшего... посол ваш Миколай и пр., 我々の親愛なる兄弟であるあなたから... あなたの使者ミコライは、など。しかしはるかにしばしばみられるのは：посла твоего Миколая приняли... посол твой говорил...и ты б, брат наш дражайший и любезнейший Рудольф Цесарь и т. д. そなたの使者ミコライを受け入れた... そなたの使者は言った... そなたは我々の親愛なる、大切な兄弟であるルドルフ皇帝、など（*грамота 1594 г. Памятники, ч. I. с. 1360-1361 и др.*）。

なおフョードル・イヴァーノヴィッチのペルシャのシャー（国王）アバスへの書簡には：и нам бы... с отцом вашим, братом нашим, потому же быти в дружбе 我々と、我々の兄弟であるあなたの父上にとって、だからこそ友好関係にあるのです。ふだんはты, твой が用いられている。（*Грамоты 1593 г. Памятники диплом, и торг. сношений Моск. Руси с Персией, т. I, СПб 1890, с. 3 и сл.*）。また、アバス国王の翻訳された書簡においても：《и на всех недругах быти нам с вашим царским величеством, а вам, брату нашему, с нами заедин 貴皇帝陛下と我々はすべて敵の中にいるが、我々の兄弟であられるあなた様にとって我々は一つであります。しかしながら、тот тебе, брату нашему... недруг и пр.

我々の兄弟であるあなたにとってはその者は敵 などもある》（*грамота 1595 г. Памятники дипл. и пр., с. 371 и др.*）。

17世紀の前半においては ты に代わる вы の使用は外交文書の交換において進歩をみた。その結果50年代（アレクセイ・ミハイロヴィッチの時代）の証書の中にときに、もはや以前のような両方のかたちの呼びかけの混合使用はみられない。1656年のアレクセイ・ミハイロヴィッチからフェルディナンド三世への手紙もそうである。《В прошлом во 162 году посылали мы, в. г. наше царское величество к вам, брату нашему, в. г. к вашему цесарскому величеству наших... посланников (и пр.) . И писали... вы, брат наш, в. г. ваше цес. в. во в грамоте своей... что вы, брат наш (и т. д., до конца грамоты). 昨年の162年（訳注5）、ツァーリである私は大帝さまに使者を遣わしました。あなたさまは、我々の兄弟であります大帝さま、ご自分の書状の中で... お書きになりました... П. Д. С.. т. III, с. 536 и сл.》

ピョートルの時代、90年代までには вы で呼びかけるかたちは外交文書の遣り取りの中で最終的に確立された。《書簡と文書》の第一巻に収められたピョートル大帝の外国人の僧侶への多くの手紙（№104-105, 110, 115-116, 119-121, 131-132 など）

ど)のうち、тыが呼びかけとして用いられているものはもはや見られない^{註7}。

このように、ピョートルの時代以前において外交的な文書の遣り取りが一番早くに вы のかたちでの呼びかけが芽生える土壌であったのはあきらかである。вы のかたちでの呼びかけは広く普及することではなく、ロシアの人々の間にはなかなか広まることはなかった。

外交的な文通、一般的に外国政府との関係の枠内においても、モスクワルーシにおいて ты に代わる вы の使用は、最初まったく知られていなかった。

このような現象の歴史に関する資料の中に、若い帝のミハイル・フョードロヴィッチと彼の母親で修道女のマルファが父であり夫である総主教フィラレト（訳注6）に宛てた1619年及びそれ以降の手紙がある。これらの書簡は、私信にしてはかなり凝った高文体で書かれていること、教会スラヴ語的麗美な表現の精神において、豊富な修辭的表現装飾によって彩られていることで際立っている。

これらは全て вы で呼びかけるかたちをとっていることで特徴的であり、ときに徹底してこのかたちがとられている。例えば、№30, 36, 37, 42 などである。このスタイルの例を挙げてみよう：

《Сын вашего во плоти благородия, паче же по духу, царь и великий князь Михаило Федоровичь всея Руси вашего святительства равноангельному лицу челом бью. Возвещаю, государь, вашему святительству, яко мы и мать наша... поспешеством святых ваших молитв в село Спасское пришли есмя... Да молим ваше превосходящее святительство... яко ... и паки к вам в царствующий град возвратитися здраву и радостну и руку вашего святительства целовати с радостию и по достоинству вашему святительству челом ударити 氣高きの具現化であられますあなた様、精神においてはなおいっそう氣高きあなた様の息子、全ロシアの大公であるミハイル・フョードロヴィチが、大主教さまの、天使にも等しいお方の顔前で叩頭いたします。大主教さま、あなた様にお知らせいたします。聖なるあなた様の祈りの助けによって、わたしと母上はスパースコエ村に到着いたしました。大主教さま、私たちは再び、あなた様のもと、首都に、元気で笑顔で戻れ、大主教様の手に喜びとともにくちづけし、大主教様の尊厳に叩頭できますことを祈っております》（№30, с. 40-41. Письмо ц. Михаила Ф. патриарху Филарету от 26-IX 1619 ミハイル・フョードロヴィチから総主教フィラレトへの手紙：1619年9月26日）。

^{註7} 興味深いことにトルコのスルタンへの文書（№274-275 1699年）では彼に вы で呼びかけているのに対し、トルコの首相、アムド・シャフ・ザドエ・フセイン・コプリュリには ты で呼びかけている（№276 1699年）。

《Возвещаю, государь, вашему святительству, яко сын ваш, вкупе же и мой... и я в село Спасское пришли есмя... Да подаст нам (бог) здраво и весело возвратиться ... и целовати вашего святительства руку со усердием и стопам вашим поклониться и челом ударити. 君主様、大主教様に申し上げます。あなた様の息子、わたくしの息子でもあります...は、わたくしとともにスパスコエ村に参りました。神様がわたくしたちに、明るく元気に帰って大主教様のお手に熱く口づけし、あなた様の足許にひれ伏し、叩頭いたすことをお与え下さいますように》(№3 1, с. 41. Письмо инокини Марфы патриарху Филарету от 26-IX-1619. 修道女マルファから総主教フィラレトへの手紙: 1619年9月26日).

《Егда же убо, великий- государь, прочтохом о вашем здравии...А здеся, государь, в вашей царской отчине... здраво все. Молю ваше царское благородие да повелиши нам писаньем почасту возвещати... чтобы мы, слыша ваше царское путное шествие здраво и весело, духовно веселился　そこで大君様、あなた様のご健康についてうかがい...　ここでは、君主さま、あなた様の天領では... 何も変わりはありません。帝さま、どうか我々に手紙によってあなた様のご様子を頻繁に知らせるようにご命じ下さいますように。そして我々が帝さまのつつがなく、楽しきご旅行のことを伺い、心からよろこべますように》(№32, с. 297. Письмо ц. Филарета царю М. Ф. от того же числа フィラレトからミハイル・フョードロヴィチ帝への手紙：1619年9月26日).

《Пожаловал еси, государь, писал ко мне... что вы, великий государь, и сын ваш... князь Алексей Михайлович, и твоя государева... царица и великая княгиня Евдокея(и пр.) в село Братошино пришли... И пожаловати бы вам, великому государю, велети мне (и пр.), чтобы мне, отцу твоему и богомольцу, про то ведомо было. あなた様はおいでになって、わたくしに手紙をお書きになった。大君主でありますあなた様、あなた様の息子のアレクセイ・ミハイロヴィチ公、そしてそなたの妃、大公姫エヴドケエヤ他が、プラトシノ村へ来られました。そのことを、あなた様、そなたの父、礼拝者であるわたしが知るように、わたしに対して(人に) お命じになって下さればよかったものを》 (№ 380. с. 297. Письмо п. Филарета царю М. Ф. от 15-X-1631 Филаретから帝ミハイル・フョードロヴィチへの手紙: 1631年10月15日).

また彼女がミハイルとフィラレトの共同統治者でもあることによって三者は結ばれている。

ここでの《вы での呼びかけ》は、外公文書、外国の修道士との生活経験から取り入れられたとも考えられるが、別の説をとることも可能である。すなわち、この習慣は、西ヨーロッパのものではなく、ポーランド経由のものである、という考え方である。彼等の文通の時期は、フィラレトが、ポーランドでの捕虜生活から還って後の時期とちょうど一致する。

このことと関連して、いまひとつの現象について触れておこう。ツァーリ、アレクセイ・ミハイロヴィッチの幾人かに宛てた文書の中に、時々一見妙な、二人称単数形と連辞の еси に代わる、 есте を伴う過去形の結合が見られる：

и ты бы есте шель... во Брянскъ... и ты бы есте, помня нашу государскую милость, шель не мешкая あなたはブリャンスクに行きなさい...そして我々の君主の恩恵を思い出し早速にやって来なさい。(к Ю. А. Долгорукову ドルゴルーキーへ1655年)。

и ты бы есте шель исъ Школва въ Могилевъ シュコルフからマギーレフへあなたは行きなさい。(к полковнику Фастадену, 陸軍大佐ファスターデンへ1655年)。

и ты б есте збираль солдатъ неоплошно あなたはまちがひなく兵隊を連れて行きなさい。(к стряпчему П. В. Зиновьеву, 1655 года ズィノーヴィエフ宮廷官へ1655年) (Записки О. Р. и Сл. Арх. О-ва, т.2(1861), с.722, 724, 730 и др.)。

パーフェクトの形の連辞の正しい使い方がある中で(訳注7), 17世紀の中頃において есте を伴う語結合を、にわかに使われだしてきた敬称形の呼びかけことばに置き換えてみることは純粋なロシア語の土壌にとっては誘惑的なことである(訳注8)。

このようにピョートルの時代だけでも ты に代わる人称代名詞 вы の丁寧なかたちは、ある程度大衆的な現象、会話体の特徴となった。この用法はただ外交文書のスタイルにだけ特有のものではなくなった。18世紀のロシアの人々にとって新しい、不慣れな(しかしながら既に国際的になったところの)呼びかけことばのかたちを自分のものにするようにと提示された。そして彼らはそれを為したのである。

IV

人称代名詞の вы の丁寧なかたちとしての用法はすぐには確立しなかったであろう。ほとんど18世紀全般にわたって一貫性のないこの用法が見受けられる。すなわ

ち、**ты**と**вы** 両者の混合使用である。40年代、50年代はこれが顕著にあらわれていた。ところでこの点に関して、エリザヴェータ・ペトロヴナが、デミードフに宛てた1744年から1751年にかけての手記が興味深い。呼びかけことばが頻繁に出てくるこの手記において、**ты**での呼びかけと**вы**での呼びかけが混用されている。例えば №2 の手紙であるが、**ты**の呼びかけで始まっている：《Прикажи Северину сделать полшлафрок ガウンを作るようにセヴェーリンに命じなさい(и пр.)》。ところが次のことばには **вы** が現れている：《Надеюсь, у вас куплена есть. あなたのところに買ってあればいいのですが 》。そして次も《Ежели осталось широкого плетешка серебряного, которой вы при отъезде моем отдавали портному... а ежели нет, то купите 私が立つ時にあなたが仕立屋にあげた銀色の幅広の組み紐がもし残っていたら... もし無ければ、買って下さい》, という具合に最後まで続いている。№5 では反対に**ты**のかたちが優勢である：《Призови купца к себе... Прикажи ему сыскать... А ежели ему скажи, он утаит 商人を呼んで... 探しだすように命じなさい... もしそれでも無ければ...彼にこっそり盗むように言いなさい》など。そしてただ一度だけ：《То вы сперва купцу скажите...そしたら最初に商人に言いなさい...》となっている。№1 と№3 ではそれぞれ一度だけ**вы**が出てくるが、№6 では**ты**になっている：《Указ изготвь в Соляную Контору и вели 塩局への法令をつくって実行しなさい(и пр.)》。デミードフの報告の追伸にも：《Ежели у вас эта Беркузена скрипка, то пришли к нам もしもあなたのところにバイオリンのベルクーゼナがあったらわたしたちのところに来て下さい》...のようになっている(Русский Архив за 1878 год, кн. I, с. 11-13)。このような呼びかけことばの形態のぐらつきはこれ以降も見られるが、時代が進むにつれて**вы**での呼びかけがより普及していくことになる。エカテリーナ二世のポチョームキンに宛てた手紙の中にも両者のかたちの混合がみられる。例えば：《Бог видит, я и день и ночь и во всякий час мысленно с вами わたしが夜も昼もいつでも心の中であなたと一緒にだということを神様はごらんになっています》 しかしながら次には《Прошу тебя только... Я к тебе уже писала ただあなたにお願いしたいのは... わたしはあなたにもう書きました》...とある(1787年10月18日)。また、1787年6月25日の手紙においてもそうである。ところで女帝が彼女の寵臣に呼びかける通常の形は **ты** であつたと考えられる。なぜなら、ほとんどの書簡の中で別の呼びかけは見受けられないからである。もちろん、フランス語での呼びかけで **вы** とならなければな

らない場合は別であるが：《а обо мне будь уверен, что я тебя как душу люблю わたしのことを信じて下さい。あなたを心から愛していることを》（1782年6月3日付 Русская Старина, за 1876 г. том V-VI, с. 34-50, 249-256).

この時期二つの形の呼びかけの混合使用は広い範囲でおこなわれていた。フォンヴィージンの書簡においてさえも時折観察できる。ブルガーコフ（Я. И. Булгаков）への手紙の一つ（1778年1月25日付）は вы で始まっている：《Дружестое письмо ваше... я получил... Позвольте поздравить и вас(и пр.)あなたの友情に満ちた手紙を受け取りました。あなたにもお祝いを言わせて下さい 》ところが終わりはты である：《Прости, милостивый государь мой Яков Иванович, люби нас столько, искренно мы вас любим

我がヤーコフ・イヴァーノヴィッチ様、我々を惜しみなく愛したまえ、我々は心からあなたを愛しています》。ブルガーコフ への別の手紙は вы で書かれている。また他の人への手紙も原則として вы で書かれているがこの原則からの逸脱もみられる。例えば、ズィノーヴィエフ（С. С. Зиновьев）への二通目の手紙に彼の妻への追伸がある。それはやはり вы で始まっている：《Позвольте, матушка Катерина Александровна, засвидетельствовать вам Катерина・アレクサンドロヴナさま、どうかあなたにわたしの正当性を証明させて下さい》... しかしながら終わりは ты である：《Прости, матушка К. А. Дай бог, чтобы ты была столько счастлива, сколько того достойна и сколько я желаю

Катерина・アレクサンドロヴナさま、どうかあなたがそのすばらしさの分だけ、そして私が祈る分だけお幸せでありますように》（1773年2月22日）。姉のフェオドーシア・イヴァーノヴナへの多くの手紙にも部分的に混合使用が見られる：《 С чего вы вздумали обвинять меня политикою... С чего уверяете меня своей искренностью (и пр.)どうしてあなたは政治のことでわたしを非難しようなどと思いついたのですか... どうして自分が誠実であるなどと私に対して述べるのですか》, しかしながら《Во-первых, я сказываю тебе... Я знаю, что ты мне друг(и т. д.) まず第一にあなたに言うが...私はあなたが私の友人であることを知っている》（1763年8月10日から最後まで）。反対にその中のいくつかは ты のみで書かれている。

18世紀の後半には выканье はすでに支配的な地位をしめてはいたが、おそらく、口語の日常会話の中でもこの時期のこの社会層の中で一人の人間に呼びかける際、тыと вы の間でゆれがあったことは確かであろう。もっとも残存的な現象として тыканье もまだ残っていた可能性がある。フォンヴィージンの作品である《Разговор

у княгини Халдиной ハルディナ公爵夫人のところでの会話》(1788)の中で二人の主人公、公爵夫人とそのお客のソルヴァンツォフ、中年の貴族が ты で会話をしている：

《А. Сорванцов, голубчик. Здравствуй. Садись возле меня. Откуда? Солвванツォフさん, あなた, こんにちは. わたしのそばに座って. どちらから?》

《Из присутствия, княгиня. Ты знаешь, что я судья? お役所からですよ, 公爵夫人. わたしが裁判官だということ, あなた知ってますか?》など.

後にこの状況についてプーシキンはこの《会話》に関してのコメントの中で触れている(1830年)：《Статья сия замечательна... как любопытное изображение нравов и мнений, господствовавших у нас лет сорок тому назад. Княгиня Халдина говорит Сорванцову ты, он ей также. この記述はすばらしい... わが国で四十年前に支配していた風習や考えの興味深い描写として. ハルディナ公爵夫人は, ソルヴァンツォフに ты の呼びかけで話をしている. 彼も彼女に同様に話しかけている》.

しかし, このスタイルは, この二人だけの間でとられているものであり, 第三者であるズドラヴォミースリは, すべて вы による呼びかけを用いている. 公爵夫人もソルヴァンツォフも彼には вы で呼びかけている.

興味深いことにプガチョフの同士たち, またプガチョフに組織された反乱の参加者たちの指令や手紙も政府陣営のものとこの点に関して変わりはない. プガチョフ政府から発せられた法令はその大半が вы による呼びかけとなっている. 例えば,

《Пугачевщинаプガチョフ蜂起》の第一巻の中のコサック, アンティーヴォフへの命令(№29, 44, 50, など)：《повелевается вам, учинить вам по сему указу и пр. あなたへの命令はこの法令に従って行うこと》また, コサック軍の大尉, チュグヴィンツェフに対しては(№28 《на репорт ваш あなたのレポートに》)など, 陸軍大佐のスホドルンに対しては(№68 《с командой вашей, которую вы при себе имеете あなたが今持っている隊と共に》)など, また, 《伯爵》チエルニシェフに対しては(№26

《чрез посланного от вас козакаあなたのところから遣わされたコサックを通じて》)などがある. さらにプガチョフ自身による, 《皇后》ウスチーニャ・ペトローヴナへの手紙においても вы が用いられている(№262：к сведению вашему, я от вас всегда известного получения желаю...ご参考までに申し添えますが, 私はいつもあなたからお手紙がいただけるのを願っています)など. しかしながら別の文書では ты のかたちになっている

ものもある。例えば、アタマンであるアラポフに対しての指示、(№23 : повелевается тебе そなたへの命令は №24など)、また、同じくアタマンのボロボロードフへの指示、(№54 : к тебе указ послан そなたへ法令が送られた) などである。両方のかたちの混合使用の例もある。

それは、例えば、エカテリーナ二世時代の知事である、レインズドルプへの《法令》の中にみられる(№73 : довольно известно вам, только вы ослепясь не приходите в чувствовласти нашей усердно покорись... 貴方にとってはあきらかなこと。ただ貴方は、理性を失ってそのような気持に至らないのだ... 衷心から、我が権力に降伏せよ)。

その事務的な実務に際して、プガチョフ一党はある種の《 Книга печатных и письменных указов 印刷法令書集》を用いていたことが知られている。おそらくこれは、首都において発行されたものであろう。資料集《Пугачевщинаプガチョフ蜂起》(изд. Централарнива, т. М. 1926, с.228)参照。

支配階級の言葉の中で ты に代わる вы の不安定な使い方が存在する中で、人称代名詞 ты は18世紀の終わりまで、またそれ以降も《上流階級》の(つまり自分自身を上流階級とみなす)人々が《下層階級》の人々と話す場合の、また、おそらく《下層階級》の人々の間での会話におけるふつうの呼びかけであった。18世紀の後半の状況に関してはスマローコフの証言において既に触れた。

社会階層の違いによる使い分けに関してその分化がほとんど完了したことを物語っている文学作品をひとつ紹介したいと思う。クニャジニンの詩《Ты и вы. Письмо к Лизе (Ты と вы. リーザへの手紙)》である。この詩は次のように始まる：

О ты, которую теперь звать должно в вы,
С почтеньем, с важностью с уклонкой головы.
О прежня Лиза, ты. Вы барыня уж ныне.

ああ、きみ、でも今は「あなたさま」と
呼ばなければならない。
敬意と尊大さと傾頭とともに。
ああきみは、前は、ただのリーザだったのに
今となっては、もうあなたさま、貴族の奥様だ。

詩人の恋人がまだ上流夫人でなかった時にはまだ彼女を **ты** で呼ぶことができた：

Воспоминание, как вы была лишь только ты,
Еще не знающая величия мечты,
На имя Лизаньки мне нежно отвечала,--
За пламень мой меня улыбкой награждала...

あなたさまが、ただのきみだった頃の思い出、
大きな夢をまだ知らずに、
リーゼンカ！の呼びかけに、
やさしく答えてくれていた。
わたしの燃えたぎる炎に対し、
微笑みで報いてくれていた。

ところが、ある身分の高い将官が言い寄ってきて、ふつうの娘が、**вы** で呼ばねばならない《高貴な御方》になってしまった。

もちろんこの話し手の社会的立場からみた人称代名詞 **ты** と **вы** の使い分け、つまり彼が誰と話しているか、社会的に上の人か下の人か、または同じ社会層に属している人との会話による使い分けは19世紀の初めまで、場合によっては50年代まで残っていた。この時代に関する事実を回想録の中にみることができる。例えば：

1) サハロフ（Н. В. Сахаров）の回想（Русский архив, 1-3, с. 223, 1916）から：
《彼（カールシの知事ブルガーコフ, 1854-56年）が、法定の貴族的要素に対してとった唯一の敬意は、裁判官と判事に対して **вы** で話しかけたことである。秘書と弁護士に対しては **ты** であった》。

2) 《七回の逮捕》という回想においてサリアス伯爵は、少年時代に不良とまちがえられてたまたま通りかかった《お方》に逮捕されたことを語っている：《-- Хорошо, хорошо... Отсидишь, не будешь озорничать, わかった, わかった, お務めをちゃんと果たしなよ, 乱暴狼藉はたらくんじゃねえよ》 -- 彼は小さいサリアスを巡査の方へ引きず

りながら言った。ところが、道々、尋問しながら少年が伯爵家の息子と知る、と《逮捕者》に対する態度が急変する。交番に連れていくのをやめ、少年を放して彼の前で言い訳までし始める：《-- Да я из-за угла вышел... Только и видел, как вы этого мальчишку вытянули. ええ、角っこから出たとき... ただあなたがこの少年を引きずり出してたのを見ただけですよ》(Ист. Вестник, за 1898 год, т. 71, январь, с. 93. これらの回想は50年代のはじめのものである)。

また、レフ・トルストイの《Детство 幼年時代》におけるニコレーンカが、ナターリア・サヴィーシナが彼の顔を濡れたテーブルかけで《ぶん殴った》時にどれだけ憤慨していたかを思い出してみよう：-- なんて、-- 涙にむせびながら私は独りごとを言った。-- ナターリア・サヴィーシナが、ただのナターリアが、あの農奴が、僕を ты で呼んで、僕の顔を濡れたテーブルかけでぶつなんてことができるんだ、下男の子みたいに。こんなの、あまりにひどすぎる！ (15章)。

19世紀に近くなるにつれて、どんどんと普及率を伸ばしていった вы での呼びかけについて語る際に、18世紀の中頃、後半は、ロシアの《上流階級》の中でフランス語の影響がどんどんと増していった時期であることを見逃してはならない。上流階級の口語のフランス語では、近しい相手に対する呼びかけに際してさえも вы (vous) で呼びかけなければならない²⁸。このフランス語の用法はこの時代には ты での呼びかけ方においてロシア語と張り合っている。ところでこれに関連して現代人の注意をひく奇妙な現象がある：フランス語で話す時は、話し手の双方が вы で呼びあい、ロシア語で話す時は ты で呼びあうのである：《女帝（エカテリーナ二世）が大公（パーヴェル）とフランス語で話されている時は彼を〈monsieur le grand duc（大公様）, vous〉と呼び、ロシア語で話されている時は、〈ты, тебе, батюшка〉と呼ばれていた》(Порошин. Записки, СПб, с. 484, 1844)。最終的に вы での呼びか

²⁸ ところで1878年におけるフランス語における вы の用法に関するあるおもしろい会話についてここで挙げておこう。会話の主はエカテリーナ二世とリン侯爵である。《あるとき彼女（エカテリーナ）が言った：— 不思議だわ、なぜ выканье が全般に使われるようになったのかしら。どうして ты が追い払われてしまったのかしら。— 陛下、そういうわけではないのです、—— とリン侯爵、—— ты はまだずっとすべて偉大なものの付語に用いられていますよ：わたしたちはすべての御祈りにおいて神を ты と呼びます。— そうだわねえ！ でもそれならどうしてあなたがたは私に対してかしこぶるの。そしてエカテリーナは тыканье の例を挙げながら、ты が以来あらゆる場面で付加され、一番打ち解けたニュアンスをあらわすことができることを語る》(Вестник иностр. литературы, 1895, август. Из статьи : «Императрица Екатерина II и маркиз де Линь», реферирующей книгу Люсьена Пера под тем же заглавием, с. 10)。

けが、上流の、あるいは彼らが言うところの《よき》社会で確立されるのは、この社会がフランスの影響を受けたそのピークの時期、18世紀の後半10年から19世紀のはじめ10年にかけてであった。人称代名詞 **вы** は最終的にこの時期に丁寧なかたち、慇懃なかたちの代名詞としてロシア語の中で市民権を得た。

反対にそれにともなって人称代名詞 **ты** は失礼で無礼な呼びかけのかたちというイメージを獲得することになる。もちろん会話の相手同士の近しさ、親しさ、忌憚の無さの表現力において右にでるものはないのであるが。19世紀初頭の作家たちは、このような **ты** を《искренний》な **ты** とか《сердечный》な **ты** と名付けた。

例えば、フョードロフ（Б. Федоров）の喜劇《Наказанная ханжа 罰せられた偽善者》のなかで：

Не тот и голос стал, не тот как будто взгляд,
И искренне **ты** на **вы** переменят (СПБ, 1817. с. 20)

声もさきほどとは変わり、まなざしも変わったようだった。
そして心を込めて **ты** から **вы** へとことばを換える。

恋しがりながら口論となってしまった夫婦についてである。

このような **ты** をプーシキンは《сердечный ところからの》とよんでいる。

Пустое **вы** сердечным **ты**
Она, обмолвись, заменила
Пред ней задумчиво стою,
Свести очей с нее нет силы
И говорю ей: 《Как **вы** милы》.
И мыслю: 《Как тебя люблю》. (1828)

空虚な **вы** に代えて、ところからの **ты** を
彼女はうっかりと口に出してしまった
そのとたん私の恋する心のなかに
すべての幸福の夢が呼び覚まされた
彼女の前に、物思いがちにたちすくむ

彼女から視線をそらす力さえない
そして彼女に言う「貴女はなんて可愛いかなでしょう！」
そして思う「どれほど君を愛していることか！」

この詩の原稿における вы の形容詞は、実は異なっていた：

Холодный вы сердечным ты
Она ошибкой замеила(и пр.).

ジュコフスキーからヴェネヴィーチノヴァへの手紙（Письмо Жуковского к А. М. Веневитиновой от II-III 1849.）の中から参照してみよう：《Хотел по старому обычаю сказать вам ты да вспомнил о муже и смирил свою дерзость и подклонил поседелую голову под иго строгого вы. 古い習慣に従って、あなたに ты と呼びかけたくなった、するとあなたの夫のことを思いだし、我が心の厚かましさを抑えた。そして、この残酷な вы の軛の前に、白くなり始めた頭を深々と傾伏させる》（Русский Архив, с. 6, 1877）。

もちろん、19世紀の前半そしてその後の ты のこのような用法を証言する事実をここで挙げ連ねるいかなる必要性も（それに余裕も）ない。その多くが回想録関係の資料の中にある。例えばタラーホフの証言を引用することができる：《彼（ケッチェル）は親しい知人に対して вы でなく、 ты で呼びかけていた。なぜなら ты のほうがより自然で、より心がこもっているからである。》（40年代：Ист. вестник, т. 47, с. 407, 1892.）他の資料については詳しくみることはひかえよう。

文学作品からは一つの引用にとどめよう。ゴンチャロフの《Обрыв 断崖》からである：《彼（ライスキー）は彼女（ヴェーラ）に自分を従兄弟ではなく兄さんと呼ばせるところまではこぎつけた。しかし彼女は ты で呼んではくれなかった。 ты はそれ自体で、なんの理由もなくお互いの立場がときには欲しくないような多くの権限を与えられている。親密さを生み出して、ときには不必要なそしてしばしば相手の友情と結びつけられて窮屈にする、と言って》（ч. III, гл. 2.）。

誠実さや関係の親しさを表わさない ты の用法に関してはまた別の問題である。

結局のところ、見知らぬ人との、あるいはあまり親しくない人との会話の中で ты を使うことが社会的状況において教養の無さ、育ちの悪さ、不作法なイメージと結びつくことになったのである。この状況を描写しているいくつかのばらばらな事実

を挙げておこう。例えば、モスクワ大学の歴史から：

1) 学生監のシュペイエルについて (60年代)

《学生たちに対してシュペイエルはまるで少年たちに話しかけるように呼びかけていた。しかし気分の良い時には彼らに вы で話しかけ〈我が友〉と呼んでいた。しかしながら大半において彼はただ乱暴で怒った時には例外なく皆に〈тыкать〉していた》(Воспоминания смоленского дворянина, гл. XII. Русская Старина, с. 133, декабрь, 1895).

2) 《モスクワで、まだ60年代に学生たちはクリロフ教授が彼らに ты で話していたことに耐えしのんでいた。一人のアルメニア系の東洋人の学生が彼に、-- ぼくには ты で呼べないだろう、と叫ぶまで》(Боборыкин. За полвека. М. 1929, с. 70).

クリロフについての記述も参照しよう：《彼は自分自身を ты で呼ぶ資格があると思っていた。このことは他の人にショックを与えた》(Кареев. 《Анекдота》, в сборнике 《Анаторий Ф. Кони》 с.86, 1925).

演劇関係の回想の中から：《つい最近のことだが男優も女優もまるでクラリネットのマウスピースのように見られていたのを覚えている： ты や他の〈やさしい〉言葉が流行していた》(Письма Н. В. Кукольника к потомкам. Русская Старина, кн. XI, с.422, 1888. 60年代のはじめの手紙).

上司や一般的に《上位》に位置する人物が社会階級的に下位に位置しているものや隷属しているもの、その置かれた状況から同じように呼び返せないものへの呼びかけにおける特別な特権的な《тыканье》について描写している資料がある：

1) 《帝国劇場に勤めたいかい、とボルショフが私に尋ねた。尊大で特権的なトーンでもって、直接 ты で呼びかけながら》(Воспоминания актера Алексева. с. 128. М. 1894. 俳優アレクセーエフの回想 ニコライ一世の時代の回想録).

2) 《それで元帥(パスケーヴィッチ)が主人に好意をお寄せ下さって、きつい口調ではけっしてありませんでした。もっとも彼への特別な位置づけのしるしに彼に ты で話しておりましたが》(Письмо Ольги Серг. Павлицевой от 8-X 1837. Русская старина, с 560, сентябрь, 1896).

3) 19世紀の20年代についての回想録の中で、カーメンスカヤは仮想のオランスキー王子が参加したあるマスカラードのことについて語っている。マスクの効果

が十二分に発揮されてほとんどの人が雲にまかれた。《彼（仮想の王子）はうやうやしく二本の指をピョートル・アンドレーヴィッチ伯爵にさしだして言った：〈Я, Толстой, очень рад, братец, тебя видеть. わたくし、トルストイは、兄弟よ、きみに会えてとてもうれしい〉》。それから続けて：《ピョートル・アンドレーヴィッチ伯爵に ты で話して、彼にクワスを振りかけるだなんてとても信じられないことでしょう。どんな人でも彼を信じたでしょう》。

4) 《ヴィエルゴールスキ伯爵は、ロシアの習慣に従って、好意的な友情からわたしに ты で呼びかけた》（Приключения лифляндца в Петербурге: Русский архив, с. 440, кн. 3, 1878）。また次の資料も参照：《ロシアの高官はアレクサンドル一世の時代でさえも将官職にないものすべてに対して ты で呼べる特権を保持していた》（Пекарский. Наука и литература при Петре В. с. 182, т. II. 1862）。

ゴーゴリの《死せる魂》の第二巻における、テンテニコフとベトリーシェフ將軍との口論についても触れておこう。ベトリーシェフが彼に対して、なにか軽べつ的に《любезнейший, послушай, братец и даже ты 親愛なるきみ、聞きなさい、兄弟、ты よ》と話しかけている状況がひかれている。テンテニコフはとても丁寧に、しかし断固たる口調でベトリーシェフにその話し方をやめるように提案する。ゴーゴリの言葉によると、將軍は当惑したがしばらく考えて言葉を選びながら話しはじめた：《ты という言葉が発せられたのは、かつて年長から年少へ ты と呼ぶことが許されていた、その意味ではないのだよ（階級については一言も言及しなかった）》。周知のとおりチチコフは全面的にベトリーシェフを支持した。《これは將軍の習慣です-- と彼は言った、--- 彼らは皆に ты で話している。ところでどうしてこれを功労者や立派な方々に使ってはいけないのでしょうか》（М. д., т. II гл. I.）。

上でふれた前世紀の前半、また中頃における ты の用法に関連してザスーリッチ（В. Засулич）の《回想録》（М., 1931）の中からもう一つ指摘することができる。著者は、逮捕の後の彼女に対する護送隊員たちの態度について語っている。《И где это ты стрелять научилась . В этом ты не было ничего враждебного, -- так, по-мужички. どこで射撃を覚えたんだい。この場合の ты は全く敵意のあるものではなかった。ただ

百姓風に言ったまでだった》(c. 69)^{註9}。

続いて、人称代名詞、вы, ваш と ты, твой の分化が始まる。上で言及したことは、この分化の延長線上のただいくつの例に過ぎない。実際、その他のものはさほど本質的で重大なものでないとしてもそれらの数は多い。

ここでは少なくとも二つの分化の可能性を指摘する。

a) 詩的言語と口語の違いによる分化

1) 詩人バートウシコフがツルゲーネフに宛てた1816年10月14日付の手紙は、詩的な呼びかけの ты で始まっている：

О, ты, который средь обедов (и пр.)

おお、食事のたびに...であるきみよ

あとは вы の呼びかけで続いている：

Сделайте что-нибудь для нее (Поповой) вы,

который...なにか彼女(ポロヴァヤ)のためにあなたがしてあげて下さい

(Русская старина, т. 5, 201-202, 1876.)

2) プーシキンが伯父である В. Л. プーシキンに宛てた1816年、12月の終わりの手紙も詩ではじまり、ты の呼びかけになっている：

Тебе, о Нестор Арзамаса...

Тебе, мой дядя, в новый год (и пр.)

アルザマスのネストルのあなたへ

おじさん、あなたへ新年のお祝いを

しかしながら вы での詩にとってかわっている：

Нет, нет, вы мне совсем не брат:

Вы -- дядя мой и на Парнасе (и пр.)

いいえ、あなたはまったく兄弟ではありません

あなたは、パルナッソスでもわがおじさんなのです

詩的でない部分は вы のみが書かれている：《В письме вашем вы назвали меня

^{註9} 逮捕者に対する呼びかけはただ ты のみが許されていた。しかしながら以前の逮捕者は特権階級に属している者もいた。デカプリストのヤクーシキンはその《手記》の中で彼のシベリア流刑の終わりにあたる1862年のことについて語っている：《イルクーツクでラヴィンスキー総督が我々を訪ねた。わたしと話をしながら彼は вы と ты を使うのを避け、彼の言葉はぎこちないものになっていた。彼にとっても、わたしといるのが気まずそうだった》(М., 1925, с. 119)。

П. под ред: П. О. Морозова, т. VIII, с. 5).

3) ヤズィコフ (Н. М. Языков) への韻文の手紙においてプーシキンは彼にТЫで呼びかけている。

Издревле сладостный союз

Поэтов меж собой связует...

Языков близок я тебе (и пр. к Языкову, 1824).

むかしから甘美な絆が

作家を互いに結びつけている

わたしの言葉はきみのに近い

普通の手紙の中では彼は **вы** で書いている。例えば、1826年の11月9日付の手紙では：

《Сейчас видел ваше Тригорское... Спешу обнять и поздравить вас. 今あなたのトゥリゴールスコエ村が見えてきました。早くあなたを抱きしめお祝いを言うために急いでいます。(и пр.)》(Op. cit., с. 159).

6) 口語と書き言葉の違いによる分化

1)ニコライ一世がコルフ男爵に宛てた手紙：《По случаю кончины кн. Новосильцева... нужным считаю приказать вам..ノヴォシールツェフ公爵の逝去にともない...あなたに命ずることが必要だと考える....》 コルフの注：《Говоря всем, не только приближенным, но и вообще известным ему ты, император Николай на бумаге никогда не называл никого иначе, как вы все люди,身近な人間だけでなく一般におなじみの ты で話かけながら、ニコライ皇帝は文書においては一度も誰も вы 以外で呼びかけたことはなかった》(Из воспоминаний барона М. А. Корфа. Рус. Стар. 1899, июнь, с. 532).

2) ラヴレンチェフ (С. Лаврентьев) のタチアーナ・パセックに関する回想
(1810-1889)から：

《彼女（パセック）は知りあいになって間もなく私に ты で話始めた。しかし、手紙ではいつも вы を用いていた》（С. Лаврентьев. Светлый луч из дальних лет. Рус. Стар. 1913, апрель-май- июнь, с. 110).

このように19世紀の前半において、выによる呼びかけは、支配階級の特権の様相を失い、全般的に社会的出身、身分にかかわらない、教養人のことばの一つの特徴

ロシアにおける《выкaнъe》のより後の歴史についてはいくつかの時点に立ち止まって眺めるだけにとどめよう。

ところで1882年に書かれた、オストロフスキーの戯曲《Таланты и поклонники
才人と崇拜者》を参照してみよう：

ダムナ・パンテレーエヴナ：ほんとにみんなに **ВЫ** って言わなければならないのかしら。

60年代において、ты に替わる вы の使用は《リベラルな》振る舞いの行動規準のひとつになった。フェートは自らの政治的信念によってかなりの保守反動家であるが、《Мои воспоминания 我が回想録》(ч. II, М.1890)という著書の中で、調停裁判官という名の自らの活動について語りながら《自らの立場を省みず》と次のようなエピソードを書いている。彼は、他の調停裁判官のように、まず《法廷において、農民たちに вы で話しはじめた。выで話すフランスの裁判官を模倣して。なぜならば、フランスではすべての人に вы が使われるからである。しかし、全くのためら

注11 参照：《伯爵夫人はサブローフ家の出だった。彼女はすべての点において前世紀の典型だった。ロシア語だけを使って話し、すべての人にтыで呼びかける古い、原始的な習慣を固持していた》（Воспоминания Лифляндца〈19世紀30年代～40年にかけて〉。Русский архив, кн. 4, с. 437, 1878）。

いもなしに次のように付け加えるのはどうだろう： Вы — негодяй, внушающий омерзание...あなた — 嫌悪感を吹き込むところの悪党》。しかしながらこの企ては、彼の言葉によると無に終わってしまった。《証人である老女の農婦が、ある時私に、〈Я уж тебе два раза говорила, что была одна, а ты мне все в ы (わたしゃあんたにもう二回も一人だったって言ってるのに、あんたはまだ「あなたがた」って言う)〉》と言った時から、このロシアの人間にさえわからない手法からすっかり足を洗った》。

フェートの証言によれば、(《Мои воспоминания》が書かれた) 80年代、《выканье》の手法は法廷において使われなくなった。《22年たった今日では、すべての調停裁判において、公開会議において、この技巧の行き過ぎが否定され、農民に対して、彼ら農民が裁判官に対して呼ぶのと同じ呼び方で ты で呼ばれている》

(129)。現実的には、しかしながら、ことはこのように単純ではなく、取り調べや裁判会議の時 農民に вы で呼びかけるかたちは保存され、広まり続けたようである。農民言語にとっては不慣れなことから生ずるある種の困難にもかかわらず。

この困難な状況に関してチェーホフのユーモラス短編、《Ты и вы》での提示を部分的に引くことができる。

ここでは、《司法研修生》のポピコフについて語られている。彼はN村での予審判事の職務によってある近くの村の農民、イヴァン・フィラレートフを尋問する。ты でのいくつかの導入的質問の後〈《Подойди поближе 近くに来なさい》。《Ты Иваи Филаретов? おまえはイヴァン・フィラレートフかい》など)、事務的な尋問の部分に入るとポピコフは вы で言い換える(《Вы вызваны в качестве свидетеля 証人としてあなたはよばれています》など)。そして同じ呼びかけ言葉を被尋問者の側からも要求する：

《Нужно говорить в ы... Нельзя тыкать. Есил я говорю тебе... вам в ы, то вы и подавно должны быть вежливым あなた、と言わなくてはなりません... ты で話してはいけません。わたしがお前に... いや、あなたに вы と呼びかけたら、あなたも丁寧に話さなくてはならないんです》。

しかし最後には、フィラレートフのこんがらがった証言に我慢ならずに、自ら ты に換えてしまう：

《-- Мы его из-под его за ноги вытащили.

-- Кого его?

-- Известно кого... На ком верхом сидел.

-- Кто?

-- Да этот самый, про кого рассказываю.

-- Тыфу! Говори, дурак, толком! Отвечай ты мне на вопросы, а не болтай зря!

「おれたちは、下敷きになってる奴を、足をつかんで引っ張りだしてやったんだよ。」

「奴って、誰です？」

「わかりきったことじゃねえか... 奴の上に馬のりになってたやつだよ...」

「だれが？」

「そいつさ、今おらが話してる奴のことだよ」

「ちえ! このバカ野郎、きちんとわかるように話せ! お前は質問だけに答えりゃいいんだ、よけいなことは言うな!」》

興味深いのは、フィラレートフが自分でも身分の上の人に ты で話すことは、無礼なことであるとよく解っていることである:

《Оно, конечно, вашескородие! Нашно мы не понимаем. Но ты слушай, что дальше... соряもちろんせすぜ, あなたさま! おれたちゃよくわかつとります. しかしまあ, 先聞いておくんなさい...》

彼はいくつかのことばを вы で言おうと努力する:

《Извольте Абрама Моисеевича допросить Абрам・МОЙСЕЕВИЧに聞いてください》。

予審判事が ты の呼びかたに換えたことで、自己犠牲的な言い回しの努力の必要性がなくなった時、自分のことを複数形で мы, нас と話します。

60年代に関する資料の中で別のいくつかのデータがある。1863年の雑誌《Искра》の3号に職場関係の状況における呼びかけの形の問題に関して書かれた《Ты и вы》の短評が載っている。《一人の〈分別のある〉上司, 自由主義者が職場において一人の部下である新入職員〈大いなる期待をかけられている若者〉に ты で話したことは皆を驚かせた。「私が彼に ты で話したからといって驚かないで下さい」と彼は言った。「私が保守反動家であるなどと思わないで下さい。これは、もしも私が若い者に вы で話しはじめたとしても私が破滅的な平等を布教し、あなた方の年齢や職業の上下にふさわしい区別をあなた方(若者と幾人かの官吏)の間に置いているものではない、と思われぬようにであります」》。(43)。ここで重要なのは、

この《ты》で呼ぶ上司は世論の前に、自分は純粹にリベラルな精神にのっとっている（一方では「保守反動家であるなどと思わないで下さい」、また他方では「破滅的な平等を布教していると思われぬように」）ことを自己弁護すべきであると判断していることである。

一言で言えば、вы で語りかけるかたちは、下層階級の人たちへの呼びかけにおいても標準的なものとなっていった。これに関連して、《ペテルブルグっ子たちの自己認識について》（Эпоха. 1864 г. №11）という小論の中の アヴェルキーエフ（Д. Аверкиев）の証言が興味深い：

《今日では、すでに、多くの文化人であるペテルブルグっ子たちは、百姓たちと話す時、多くの場合 вы で話しかけている。вы という代名詞は、丁寧さのシンボルで、平民の人格が認められるようになる、進歩の道筋の一步である。》

しかしながら、この時期、意識的な傾向として ты でのおよびかけ言葉の復古、保存の動きが社会的な規模で起こってくる。これは、ты を強調する意味のものであった。（しかし、батюшка, братец, дружок などの愛称形を伴うものではなかった）。

作家、ボボリーキンは、《За полвека 半世紀を経て》という回想録の中で、何行かを60年代のペテルブルグの虚無主義の若者の特徴、特にバクーニンの《副官》である Н. ウーチンのグループについてさいている。そのグループは、若奥様や娘さんたちから成っていた。《彼らはみんな互いに ты で呼びあい、自分を Машка, Сашка, Варька などと呼びながら、特別なジャルゴンを使っていた。私はこのジャルゴンを長いこと摂取するはめになり、気がついてみると彼らの仲間になっていた。彼らは常に表現の下品さで、(フランス人の言葉によると) epater (あつと言わせる) ことを望んでいた》(335-336)¹²。

1862年の雑誌《Искра》26号のユーモア作品、《進歩欄、ニヒリズム体験》には次のような記事が載っている。《うちの子は生まれてこのかた私に対して、尊敬を込めて Вы, папенька としか呼んだことがなかったのに、急に ты で呼ぶようになった。それに言うことをきかない。事態はそう甘くないようだ。おそらく、息子はニヒリズムに侵されてしまったのだ》(350-351)。

従って、文学作品における最も有名なニヒリズムの代表者であるツルゲーネフ¹² デバゴリー・モークリエヴィッチの《回想録》の中の彼の言葉を参照：《バクーニンはことあるごとに、わたしを вы でよびかけてはつかまえた。この呼びかけことばをわたしも、習慣的に ты の代わりに用いていた》(100)。

のエヴゲーニィ・バザーロフもゴンチャローフのマルク・ヴォロホフも、《父と子》、《断崖》における他の登場人物と ты と вы の使い方において変わっていないのは不思議なことである。

1860年代、ты に代わるていねいな вы での呼びかけは、学校においても確立される。いなかの学校においてもである。デバゴーリー・モークリエヴィッチは、60年代のことに関する《回想録》(СПБ. 1906)の中で、彼が学んだギムナジヤ(中学校)(カーメネッツ・パドーリスキー県のネミーロフ市)において、1859年以降、つまりピローゴフの改革(訳注9)以降、急速に秩序が変わった。《一挙に、свиное рыло〈豚の鼻顔〉も ослиное ухо〈ロバの耳〉も人称代名詞の ты も消えた。ты は господин に取って替わられた》。

このことについて、ダーリも1866年に出版した《詳解辞典》の第4巻に間接的に言及している。409ページの ты に関する解説である：

《歪曲されたていねいさがこの言葉を複数形に取り替えている。しかし、我が国では、従来、ふつうの人は、〈平民は〉誰にでも ты で話していた。農民の子供たちに вы で話すという、田舎教師の見えっ張りの自我自賛のかわりに、教師は子供たちに、自分に ты で話しかけることを強要すべきである》。

革命前の時代には、敬称形としての вы の歴史はある程度において労働運動の歴史と関係がある。少なくとも、非常に悲劇的なエピソードの一つと関連している。

それは、1912年のレンスキー事件(訳注10)である。周知のとうり、労働者に вы で呼びかけることは、ストライキ参加者側から1912年3月4日に、全体集会において提出された要求の一つであった。《16. 当局側の丁寧な呼びかけ：労働者を ты ではなく вы で呼ぶこと。(Ленские события. Статьи и материалы, 1938)》。この要求は、他のものと同様当局側から受け入れられた(《3月7日付け Объявление окружного инженера Александрова参照》：(10)事務職員は、労働者に丁寧に呼びかける義務を負う)。しかしながら採掘場で起こった事件は、この先、最終的に4月17日の悲劇につながる道へ導くことになる。

丁寧な呼びかけの要求は、第一義的な、最重要な問題に属するものではなかったであろう。にもかかわらず《上層部》の反動的調整官僚機関は、まさにこの要求に特別の関心をいだいた。例えば、前大臣ティミルヤーゼフのような暴吏は、おどけ

て大衆の前での演説においてさえも、この要求にレンスキー労働者の政治演説の意味を盛り込もうと試みた^{註13}。

最後にもう一つ述べておこう。《内務省規約》によって、軍務における人称代名詞 **вы** の使用の領域に関して細かく指定されている：《海軍兵学校艦隊実習生，宮廷擲弾兵中隊の低階級，技師軍団の特務曹長，第一級職候補者，代理陸軍准尉，代理戦時官吏，海軍兵曹長，軍医療アカデミーの特務曹長，下士官，学生に対して，長官，上官は，**вы** で呼ばなければならない。上に揚げられなかった下層のものに対しては，**ты** でよい》（по изданию Березовского: СПб 1916 с.10）。このように，規約によれば，通常の意味での下層階級の人には **ты** で話しかけ，それらの人が上官に話しかける時にはその上官が《代理陸軍准尉であろうとも，**вы** で話しかけなければならない。これは，分別のある必要性から発せられたものではなかった。しかし皇帝の政府のもとでの，軍事政権によって発せられた上記の政令は，兵隊の個人的長所を故意に低落させる性質は持ちえなかった。それゆえ，1917年の革命前夜に **ты** での呼びかけを禁止する要求が，兵隊軍団の基本的政治的要求と一致したことも驚くべきことではなかった。このようにして，有名な《1917年3月1日付 ペトログラード労働者，兵士代表ソビエト 命令書No.1》が生まれる。これは後に臨時政府によって廃止された命令書である。この命令書の7項目に呼びかけ方について直接言及されている。《命令書No.7： 同様に将校の肩書きを廃止する。《ваше превосходительство, благородие》などは，《господин полковник》〈陸軍大佐殿〉となるなど。兵隊及全軍位における乱れた言葉，特に **ты** での呼びかけを禁じる。これを侵した場合は，将校間，兵士間の別なく，中隊委員会に報告すべし》（см. 《Февральская революция》 Составил С.А. Алексеев, 1925 с 58）。

このことについては，ペトログラード労働者兵士代表ソビエトにより，1917年5

^{註13} これらの，1912年4月17日の事件の《説明》の試みに対するユニークな反響として，アルク.アヴェルチェンコの《Грозное местоимение озорские人称代名詞》という世相戯評が，雑誌《Сатирикон》（1912年17号）に載っている。この（とは言ってもあまり洒落の利いたとも思えない）世相戯評において，ティミルヤーゼフが，下層階級者への呼びかけにおける，人称代名詞 **вы** の使用の激しい憎悪者として描かれている。例えば，彼は，御者に出発できるかどうか尋ねながら，彼は《тыезд》と言う権利があると主張する：《私はお前に〈тыезд〉と言えるが，お前は私には〈выезд〉と言わなければならない。結局この世相戯評は，通行人の前大臣に対する驚嘆の声で終わっている。《Умнейшая голова! Настоящая выква!》（さすがいい頭，本物のおかばちゃんだ!）。

月15日に出された，《兵隊の一般的権利》により詳しく述べられている。《将校および兵隊に呼びかける際には勤務中においても勤務中以外においても вы で話さなければならない。 ты での呼びかけは完全に禁止する》(Матвеев の著書《 Из записной книжки депутата》 176 похотного полка , 1932 c.210 により引用)。

ペトログラード労働者兵士代表ソビエトのこれらの決定は、その後部分的に、全く政治的でない理由によるいくつかの困難に遭遇し、二つの呼びかけのかたちは、再び衝突の関係に入る。普及していった丁寧な вы での呼びかけのかたちは、何世紀にもわたって兵隊の大集団の中で根づいてきていた ты の形にブレーキをかけられることになる。今では司令官になっているような人たちも、単に仲間同士のつきあいの中で、また純粋なロシア人的なつきあいの中で、余計な考えなしに ты での呼びかけに慣れ親しんできていた。また、記憶に新しい過去、革命以前の遺物の効力が現れはじめていた。

これで本論を終えることにしよう。

この現象のその後、大十月社会主義革命以後の歴史については、おそらく、それ以前より複雑な特徴をはらみながら異なった様相を呈すであろう。これは、また専門的な研究のテーマになるはずである。

訳注

(1) П. Я. Черных "Заметки об употреблении местоимения вы вместо ты в качестве формы вежливости в русском литературном языке XVIII-XIX веков", *Ученые записки МГУ(труды кафедры русского языка)*, fasc.137, part 2. 1948.

(2) ダーリによれば助詞 с は судар の略語であり、陛下、あなた様といった丁寧な呼びかけの意味をもつ。су のかたちでもしばしば用いられる。вы での呼びかけの普及により次第に略語のかたちで用いられるようになっていった。

(3) *Памятники дипломатических сношений древней России с державами иностранными [1682—1699]*, СПб., 1862-1871. т. 6-10.

(4) リューリック朝最後の帝 (1584-98)。原文はФедор Иоанович。

(5) 天地創造から数える開闢起源 (西暦年+5508年) より6000を引いた数。

(6) 俗名フョードル・ニキーティッチ・ロマノフ (1554/54~16.33). ロマノフ王朝最初の帝ミハイル・ロマノフの父. リューリック朝最後の帝, フョードル・イヴァーノヴィチとは母方の従兄弟. 1610年, 包囲されたスモレンスクの大使館を代表して条約交渉にあたったが, その条件を承認することができず, その結果としてポーランドへ捕虜として送られる (1611~1619).

(7) この「正しい使い方」とは, 「人称代名詞」, 「連辞の現在変化形」, 「I(エル) 分詞」(「完了分詞」) の組み合わせによる, 動作の完了と結果の存続を示す時制とアスペクトの表示形であるが, 「I(エル) 分詞」にшелъ を用いた場合, 文法的には ты と вы の対応は次のようになる:

ты еси шелъ ; вы есте шли.

(8) 1654年から67年にかけてのロシア・ポーランド戦争に伴い, ポーランドに遠征しその文化に触れたアレクセイ・ミハイロヴィッチは, その水準の高さに驚き, 深く影響を受けたことで知られている. この書簡文の資料により, 彼がポーランド風の言語習慣をも自国語に取り入れようと試みていた事実が窺える.

(9) 学者, 医者, 教育者, 社会活動家であるピロゴフ (Пирогов. Н. И. 1810-1881) が行った教育の分野での改革. 身分的偏見をなくすことに力をそそぎ, 教育の一般的普及に努めた.

(10) 1912年4月4日 (旧暦17日) レナ川流域のレンスキーにおいて起こった皇帝軍による銃殺事件. レンスキー金鉱採掘労働者が過酷な労働条件の改善を求めて起こしたストライキに対して与えられた制裁. 270人が殺され, 250人が負傷した.